

乗放ち、刀にて切かけ候處切損じ、其身の足を傷付申候。猪は猶たけり五郎左衛門危く候處、乗放ち置候馬馳かゝり、猪を蹴候。ひたと逃行候を、輪をかけくいたし候て、遂に猪をば蹴殺し申候。此馬は五郎左衛門持馬にて無之候。御厩立にて御貸馬に候。其儀御聞被遊、殊の外御感じ被成、一生御飼置可被成旨被仰出、後には放し飼に罷成、御厩にて斃申候。誠に義馬とも可申候。此物語は周く人の存知候儀に付、或時會津より保科肥後守正之御前分御使者來り、御馳走人某罷出で、互に本州の珍敷事ども相語候。次に此馬の儀を咄し候。使者聞之、挨拶のうへ申候。會津にも如何様珍敷事も候。遠郷の儀故怪事候。濃茶の實のり候樹有之候と申候に付、夫は何と仕たる様子に候哉と尋候へば、されば會津は僻遠の地に候故、宇治より毎歲詰茶取寄候儀不自由に候。依之茶道敷寄候者、上林・星野等が濃茶の袋を取集め、春中に蒔置候へば間には生出したし、枝々に濃茶囊なり候て、其を以て茶湯仕候。誠に珍敷事に候と申候。虚誕妄言には極り候得共、前に承候馬の事、妄説を語り候と存じ憤り候て、俄に作り咄し仕候躰に候故、挨拶人不興に存、致後悔候よし。偽に似

たる實は不語ものと世語にも申候。誠使者たる人又は伴食など相勤候者は、可有意得事也。

一、太田道灌夫妻唱和の詠

或人の物語に太田道灌、子息を先だてゝその周忌の日、追慕に不絶して、和歌一首をよみて夫人へ贈られしとなん。其歌に、

恨しく又なつかしき月日哉別れしこぞの今日とおもへば  
夫人の返し、

こぞのけふ別れし時も今とても忘れればこそ思ひ出らぬ  
夫婦の情、寔に言葉の外にあふれ、不勝呻吟候。一字一涙。

一、太田但馬誅殺せらるゝ事

中興義経第六  
賀州中納言利長のいとこ太田但馬守雄宗は、土方勘兵衛雄久が弟也。太田氏を稱せり。國老と成て執權す。智謀ありて力量早業も人に勝れたり。三萬石を領す。慶長五年大正持城攻の時は、太田搦手の大將たり。又淺井駿にても無類の高名し、士卒の指揮于今彼家の士は手本とすと也。或時但馬鷹野に出かけるに、路傍に狐の子あそべり。但馬捕之云様は、人を惱す妖獸の子也。賜殺しにせんとて打擲し、終に狐

兒を殺せり。おや狐見之大に愁へ、頓て但馬が下女に訛し、狂妄して云様は、罪なき我子を賜殺せり。此怨念何方へ行べき哉。みよ近日太田を殺し思ひ知らせんと云けり。其頃利長卿寵愛第一の妾あり。城外に屋敷を構て入置、折節忍びて通はれけり。或夜其所へ忍びけるに、奥の方に一人の男子みえたり。太田但馬とみえて庭中へ逃出たり。黄門不思議におもひ、但馬を疑給ふ。然共黄門舌頭へも出し不給。其後又妾の所へ通ひけるに、又但馬忍べる躰にみえて行方不知成たり。今は腹にすゑかね、横山山城守に命じ、實否糾明もなく、一旦に妾も但馬も誅殺せられけり。皆人不審し哀れ悲めり。但馬其夜は高山南坊宅へ招請せられ、夜更る迄酒宴に及びければ、寵妾の方へ可通様もなし。其上深闇の内、誰人か可到様はなし。然るに何の詰問もなく、火急に誅殺成けり。後日に能穿議ありければ、件の妖狐の所爲なりとて、黄門甚後悔せられけると也。

一、立花宗茂大津城攻の時

阿第九  
慶長五年京極高次大津城に籠る時、立花飛騨守宗茂攻けるに、足輕の兵は具足の上に繩手綱を掛、其手綱の繩目ごと

に玉薬を入たる竹筒を挿み、其玉薬を繼替々々打出したり。其手廻し雨の降る如し。常の者一放ちの内には三放づゝ打たる也。

一、徳川秀忠夫人淺井氏

同上  
高次妻は淺井氏備前守長政女也。秀頼の母堂淀殿の姉也。中納言徳川秀忠は太閤の仰にて、伏見河中嶋の第にて婚禮あり。是又長政女也。此女最初は佐治與九郎と云者の妻たるを、太閤天下を知給ひて、淀殿秀頼を産せる後、秀吉が相婿には與九郎にては不足とて、其妻を奪取て大和納言秀勝の妻とし女子を生む。其後秀勝卒し後家たるに依て、秀忠卿へ再嫁也。但高次の養子とし大津の城より入興あり。

一、腹切る事は下手、鍵突く事は名人

第七。文書略す。  
富田藏人高定は、左近將監盛高次男信濃守信高弟也。秀吉の近習に仕へ、所々の戦場にて譽を取し故、秀吉秘藏し、猶子秀次關白職の刻、藏人を諫諍の臣に附て一萬石を賜ふ。是より關白へ仕へてけり。然所秀次罪を得て高野山へ赴き、文祿四年乙未七月十五日自殺の時、藏人多年厚恩を蒙る故